



ウブンドゥ…他者を通してのみ、人は存在できる

学校長 飯山 等

1月26日の朝日新聞「天声人語」のなかで、詩人の茨木のり子さんの著書『ハンブルクへの旅』の中で紹介されているという、韓国のことわざ「行く言葉が美しくてこそ返る言葉も美しい」に出会い、自然にスウォン女子高校との交流の時間が温かく思い出されて、美しい言葉で満たされた場であったなあという感慨に、全身がやわらかく包まれるようでした。

ホモ・サピエンスであるわれわれは、言葉によってつくられた世界を生きています。ゆたかな想像する力を獲得し、創造する歩みを生み出し、時間と空間というものを、言葉によって自由自在に操ることができるようになりました。その一方で言葉を、ひとをも、自身をも傷つける武器としてはたらかせてしまうようになりました。言葉がどんどん安っぽいものになって、その発語者自身にとっても、それらの言説は自分から離れてしまい、自分自身にも最早信頼されるものではなくなってしまう。親鸞聖人の「よしあしの文字をもしらぬひとはみな／まことのころなりけるを／善悪の字しりがおは／おおそらごとのかたちなり」も、そのような悲しみの、痛みの真情なのかと感ぜられることです。

親鸞聖人は『浄土和讃』という、和語による仏徳讃歎の詩を作られ、「清風宝樹をふくときは／いつつの音声いだしつ／宮商和して自然なり／清浄薫を礼すべし」と、浄土(仏の世界)のあり様を嘆じておられます。「いつつの音声」とは、宮・商・角・徴・羽という五音のこと。一オクターブに五つの音が含まれる五音音階のことです。五音がさまざまに重なるとき、たとえば宮・商(ドとレのような)という2音が重なるとき、それは不協和な排除し合う濁りとして聞き捨てられます。心地よい響きと、そうでない濁りとは選別してしまいます。しかし、浄土という仏の

世界においては、不協和な(はずの)2音が、敵対し合うことなく、やわらかく和して共働する。ともにたたらきあい、あたらしく尊重しあう一つ一つとして、自他をあらためて見出し、そこにあたらしい世界が形成されると詠っておられるのです。それは決して此方の無価値化や、彼方への単なる憧憬としてではなく、ココ・イマを傷む真情に差し込む、光の世界としてはたらくのです。

今正月(1月3日)NHK Eテレで、『沈黙は共犯 闘う医師 デニムクウエグ』を視聴しました。氏はコンゴ民主共和国の婦人科医で、2018年ノーベル平和賞を受賞されました。テレビを観るまでまったく知らなかったのですが、コンゴにおける女性の救済のために、身を挺して闘っているかたです。たまたまつけたのですが、ぐいぐいと引きつけられて、その言葉が、大谷のたいせつな精神、親鸞聖人と重なって聞こえてきました。

アフリカには「ウブンドゥ」という哲学的な言葉があります。「他者を通してのみ、人は存在できる」という言葉です。他者の人間性を認めれば自然に尊敬しあう関係が生まれます。私たちは皆、互いに依存しあっていることに気づくからです。皆がいるからこそ、私も存在できる。皆さんが負った傷は、私にも響き、人間としての私を深く動かすものなのです。人類史上、現在ほど人々が互いを必要としている時代はないと思います。

戦争に対する闘いとは相手を自分と同じ人間としては見ないということに対する闘いです。相手を人間と思わず物のように破壊してしまう発想、他者を人間と思えなくなった瞬間、つまり、自分と同じような人間としての痛みや感情を、相手は持っていないと思うようになった瞬間に、やり方はどうであれ、始まるのが戦争だと思います。激しい暴力を伴うレイプも、ほかの兵器と一緒にです。他者の気持ちになって考え、感じ取ることができる力、それが平和ということです。